

果樹栽培の省力化について

「果樹技術普及センター」



●展葉3～5枚の処理時期に花穂のみに散布する。

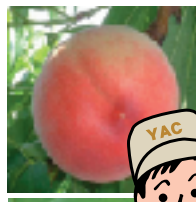
果樹栽培者の高齢化や耕作放棄地対策として、果樹栽培の省力化が求められています。

そのため、果樹技術普及センターでは、ブドウの摘粒作業を省力化する「花穂伸長による摘粒軽減技術」の普及を行ってきました。これは、巨峰群品種の展葉枚数3～5枚時に、花穂のみに低濃度ジベレリン溶液を散布して花穂の伸長を促し、着粒密度を低下させるもので、摘粒時間を2～3割削減する事が実証されています。

3月に、果樹試験場の成果として、この技術に短梢剪定などの様々な省力技術を組み合わせたブドウの省力栽培体系が発表されました。今後、普及センターでは展示ほなどを活用し、ブドウの摘粒軽減技術をはじめとした省力栽培技を農家の皆さんに取り組んでいただけるよう支援をしていきます。



FRUIT OF YAMANASHI



果樹の凍霜害対策について

● 果樹では、開花前や生育間もない新梢および幼果の頃に低温や霜に遭うと、細胞が凍結し凍霜害が発生することがあります。開花が早い品種ほど凍霜害を受ける危険性が高くなります。特に、今年は開花時期が早いと予想されるため、例年以上に事前の準備や事後対策の徹底が重要です。

● 凍霜害が発生しやすい地域のモモやリンゴなどは、摘蕾や摘花の程度を軽くしておき、結実状況を確認してから摘果を行います。作業の遅れによって一時的に強く摘果することにならないよう、計画的に作業を進めることも大切です。

● ブドウのホース栽培において、「展葉始め」以降に凍霜害が心配される場合は、前日にホースを外して被害の軽減を図ります。

● オウトウの雨除け施設では、ビニールを広げて霜が降りるのを防ぎます。オウトウは蕾が膨らみ始めた3月下旬から被害を受けることがありますので、早めに準備しましょう。

● 凍霜害が発生した場合は、モモ、スモモ、オウトウ、リンゴなどの受粉が必要な品種では人工受粉を丁寧に行うとともに、被害の少ない下向きの花や遅咲きの花にも受粉して結実を確保します。また、凍霜害を受けると生理落果や変形果などの発生も心配されますので、結実状況や果形がわかるようになってから摘果を行います。

● 凍霜害から果樹を守るためには、正確な情報をつかむことも重要です。今年は3月15日～5月20日を「凍霜害警戒期間」とし、甲府地方気象台から霜注意報が発表されますので、ラジオやテレビから放送される情報に十分注意して、万全な対策を実施しましょう。

